

第33回 日本脳神経外科同時通訳

夏季研修会 2019

抄録

ウィスパリング同時通訳トレーニング：メモリー&スプリット・アテンション演習

On with Simultaneous Interpreting by Whispering; Memory and Split Attention Practices

柴田 バネッサ 朱雀

Vanessa Shibata

神田外語大学 英米学科 講師

当該トレーニングではスパイ訓練で用いられてきたメソッド (army method) を中心に、スプリット・アテンション演習とノートテイキングの手ほどきも紹介。トレーニングはメモリートレーニング、プロアクティブ・シャドウイング、サイトラ演習などから構成。目的は記憶力増強による通訳技能向上を図るためだけでなく、学習者のモチベーションをアップすること。

次の目標は、コミュニティー通訳者を全国で育てるための指導者養成を展開していくこと。

The intermediate level of the training method of Whispering methodology is explained and three different types of training are discussed. The training featured are note-taking, split attention and memory lessons.

The thoughts and ideas shared here emerged from some army methods of spy training.

The first part of the presentation examines the notion of “Learner-centered” in the context of materials designs. Since a major part of the work in the training of future interpreters depends on the self-training of the learners, it is proper to provide some mentoring to them. The instructor’s role is to aid self-preparation, providing some useful guidelines and exercises that can be used in self-training. So, the materials are to be given in a systematic manner.

The second part focuses on note-taking exercises. Note-taking is the first hurdle a prospective interpreter has to manage to jump over. It takes some efforts and time.

In the third part several types of memory lessons are featured.

1. Main idea
2. Controversial issues.
3. Visualization
4. Detailed information
5. Dual Task
6. One sentence sight translation

In the end, a summarization method termed “Key word method” is discussed in addition to the overview of training termed “Proactive shadowing” which consists of silent shadowing, note-taking and reproduction.

i 頸部頸動脈タンデム狭窄に対して経上腕的ステント留置術を行った1例

A case of tandem stenosis at the proximal common and interval carotid arteries treated with transbrachial stenting.

伊藤 英道、高砂 浩史、後藤 哲哉、太組 一郎、田中 雄一郎

聖マリアンナ医科大学脳神経外科

【緒言】 総頸動脈近位部を含む頸動脈タンデム狭窄症に対する治療は確立されていないが、近年はデバイス進歩により CAS が主流になりつつある。しかし総頸動脈近位部狭窄例ではガイドリングカテーテルが不安定で治療に難渋することがある。経上腕的に CAS を試みた1例を報告する。

【症例】 63歳の男性。左への偏奇歩行を主訴に近医を受診し、精査で左椎骨動脈閉塞と左小脳梗塞を認め抗血小板療法を受けた。併存した左総頸動脈近位部と頭蓋外内頸動脈狭窄症の治療目的に当院へ紹介された。血管撮影ではそれぞれ70%、80%の狭窄を示し、脳血流検査では左右差を認めなかった。再発予防に CAS を計画した。総頸動脈近位部狭窄をガイドワイヤーやコアキシアルカテーテルが通過する際に生じ得る塞栓症を避けるべく、上腕アプローチから左総頸動脈へ直接誘導可能な MSK guide[®] を選択した。Simmons 形状を活かして大動脈弓部から Filterwire EZ[®] のみを内頸動脈遠位部へ誘導した。フィルター展開後に MSK guide を引き上げて総頸動脈狭窄部を通過し、頸動脈分岐部近位へ留置した。内頸動脈狭窄に対してステント留置後、総頸動脈狭窄部に Protage[®] を留置すべく MSK guide を引き下げながらステントを展開、後拡張で十分な拡張を得た。経過は良好で翌日の MRI で新たな虚血巣を認めなかった。手術1年後の CTA で再狭窄を認めていない。

【考察・結果】 総頸動脈近位部を含む頸動脈タンデム狭窄症に対する外科治療には直達術、CEA 時に逆行性に CAS を行うハイブリッド手術、CAS があげられる。CAS は経大腿法が標準だが、大動脈弓部に留置されたガイドリングカテーテルが不安定なため治療に難渋することが多い。本法は左総頸動脈に直接誘導できる MSK guide を利用して安全、容易にステントを留置できた。今まで報告された CAS 手技と比較し考察する。

ii 当院における虐待による小児頭部外傷の分析と取り組み

Analysis and management of child abusive head trauma in our institute

高砂 浩史、伊藤 英道、後藤 哲哉、太組 一郎、田中 雄一郎

聖マリアンナ医科大学脳神経外科

【目的】 当院では2001年より Marianna child abuse prevention (MCAP) として法医学を含む臨床各科、看護師、ソーシャルワーカーが連携し小児虐待に対応してきた。当院における頭部外傷を伴う小児虐待例について検討した。

【方法】 2010-2017年までに当科に入院した15歳以下の頭部外傷例を検討対象とした。

【結果と考察】 同期間に頭部外傷入院例は125例あった。症例全体では平均5.3歳で男女比は81:43であった。MCAP 介入例は10例あった。非虐待群 (A 群) と MCAP 介入群 (B 群) では、平均年齢は5.9 / 0.6歳と B 群で有意に低年齢であった。男女比には有意差はなかった。受診経路は A 群では救急搬送が53%と最も多く、B 群は夜間急患センターが50%と最も多かった。外傷の種別としては A/B 群で急性硬膜下血腫 (ASDH) が16 / 4例、慢性硬膜下血腫 (CSDH) が1 / 2例、急性硬膜外血腫 (AEDH) が28 / 1例、頭蓋骨骨折が45 / 8例、その他36 / 1例であった (重複あり)。B 群では頭蓋骨骨折と硬膜下血腫が有意に多く、AEDH が少なかった。手術は10 / 1例に行われた。入院期間は8.7 / 16.1日と B 群で長い傾向であった。転帰は GR と MD を含めた予後良好群が97 / 100% で有意差はなかった。MCAP 介入例において眼底出血は2例のみで、1例はうっ血乳頭があった。10例中8例は児童相談所に通告した。併せて当院での虐待疑いに対する取り組みについても報告する。

【結論】 虐待が疑われる症例では硬膜下血腫が多く、骨折を伴う事が多い。眼底出血は2例と決して多くない。乳幼児の頭部外傷での時間外受診例では常に虐待の可能性を認識しておく必要がある。地域社会と連携し発生と再発を防止する必要がある。

iii 脳の共振周波数は頭蓋内圧にのみ依存する

Natural resonance frequency of the brain depends on only intracranial pressure: clinical research

後藤 哲哉、田中 雄一郎、降旗 建一、本郷 一博

聖マリアンナ医科大学脳神経外科、信州大学医学部脳神経外科

頭蓋内圧を適切に管理することは脳神経外科治療において重要である。脳圧値は頭蓋内にセンサーを設置することで計測できるが、非侵襲的な頭蓋内圧類推ははまだ実用化されていない。我々は非侵襲脳圧類推の方法として脳の共振周波数を検討した。

治療目的で脳圧センサーか脳室ドレナージを留置した患者において、同意を得たうえで、脳圧値、頭蓋内圧脈波、頸部頸動脈脈波を同時測定した。計43データを27人の患者から得た。対象は平均54歳、身長は平均163cm、体重は平均61kgであった。全計測時間は29,653秒で、測定された脳圧値は3.82-69.39平均25.9hPaであった。データ解析はすべてオフラインで行った。体動やセンサーの不具合によるノイズを手動で除去した後、連続データを10.24秒毎に“コラム”として区切った。呼吸による変動を抑えるために、それぞれのコラムの中で最大振幅の頸動脈脈波の一波形を選択し、それに呼応する頭蓋内圧脈波を1つ選択した。選択したそれぞれの波形をコラム分だけ加重平均し、その2つの波形から伝達関数法をもちいて共振周波数を計算した。平均脳圧値と脳の共振周波数は二次関数に表現された（脳圧値 = $0.0329(\text{共振周波数})^2 + 0.0842\text{共振周波数}$ ）。この2つのパラメーターはお互いに強い相関が得られた。（ $R^2 = 0.9952$ ）

この結果は、疾患、年齢、体重、血圧などによらず、脳の共振周波数は脳圧のみに依存していることを証明する。何らかの方法で脳の共振周波数が計測できれば、脳圧が類推できることが示唆された。

iv 働き方改革と医療

谷口 理章

神戸大学医学部脳神経外科

少子高齢化にともなう労働人口減少への対策として提言されたのが“ニッポン一億総活躍プラン“ですが、この中で大きなウェイトを占めているのが働き方改革です。本年4月1日からは一般職で時間外労働の罰則付き上限規制が施行され、医師に対しても5年後に適応される見通しとなっています。それまでに各医療機関は時間外労働の実態把握と36協定の締結、時間外労働短縮への取り組みなどが求められており、私たちにとっても喫緊の課題となっ
てきています。一方で、時間外規制上限の妥当性、医師需給バランス、さらには宿日直や研鑽の取り扱いなど問題も山積しています。

本講演では、得られる情報を整理して働き方改革が提唱されるにいたった経緯、改革の現状と今後の問題点について可能な範囲で整理して見たいと思います。

キーワード：

働き方改革：work style reform

厚生労働省：Ministry of Health, Labour and Welfare

一億総活躍社会：dynamic engagement of all citizens

労働人口減少：state of decreasing labor population

少子高齢化：aging society problem